

## 天平時代のパンデミック―『万葉集』『遣新羅使歌群』―

ノートルダム清心女子大学 東城 敏毅

### 一 『万葉集』とは？

#### (1) 成立

『万葉集』は、現存する日本最古の和歌集で、二〇巻からなり、約四五〇〇首の和歌を収めている。しかし、成立については不明な点が多く、編者や成立年次も明瞭ではないが、大伴家持が、編纂者の一人と考えられている。

#### (2) 時代区分

第一期 舒明天皇く壬申の乱(六七二年) 額田王・天智天皇・有間皇子

第二期 壬申の乱く平城京遷都(七一〇年) 柿本人麻呂・持統天皇・大津皇子・高市黒人

第三期 平城京遷都く天平五年(七三三年) 山部赤人・大伴旅人・山上憶良・高橋虫麻呂

第四期 天平六年く天平宝字三年(七五九年) 大伴家持・大伴坂上郎女・**遣新羅使歌**・防人歌

(参照) 多田一臣編『万葉集ハンドブック』(三省堂・一九九九年)

#### (3) 漢字で書かれる万葉歌

① 「**野**」の**み草刈り葺き**宿れりし**宇治**のみやこの**仮廬**し思ほゆ

(巻1・七)

**金野乃** 美草苜蓿 屋杼礼里之 兔道乃宮子能 借五百礫所念

② 我が恋を 婦は知れるを行く舟の 過ぎて来べしや 言も告げ

吾戀 婦者知遠 往船乃 過而應来哉 事毛告火 (巻9・一九九八)

③ 若草の 新手枕を まきそめて 夜をや隔てむ

若草乃 新手枕乎 卷始而 夜哉将間 **二八十一不在國**

(巻11・二五四二)



(奈良文化財研究所「木簡画像データベース 木簡字典」より)

### 五行説

(五行)	木	火	土	金	水
(五時)	春	夏	土用	秋	冬
(五色)	青	赤	黄	白	黒
(五方)	東	南	中	西	北

### 二 天平九年(七三七年)のパンデミック

#### ● 天然痘の大流行

ア この年の春疫瘡大いに起こる。初め筑紫より来たれり。夏を経て秋に渉る。公卿以下、天下の百姓、あい継ぎて没死するものあげて計ふべからず。近き代よりこの方、未だこれ有らざるなり。

〔続日本紀〕天平九年十二月二七日条

イ 遣新羅使大判官従六位上壬生使主宇太麻呂、少判官正七位上大蔵忌寸麻呂ら京に入る。大使従五位下安部朝臣繼麻呂、津嶋に泊りて卒しぬ。副使従六位下大伴宿弥三中病に染みて京に入るに得ず。

〔続日本紀〕天平九年正月二六日条

ウ 太宰府の管内の諸国、**疱瘡**時行りて百姓多く死ぬ。詔して、幣を部内の諸社に奉りて禱らしめたまふ。また、貧疫の家を振恤し、併せて湯薬を給ひて療さしむ。

〔続日本紀〕天平九年四月一九日条

#### \* 天平九年(七三七年)に亡くなった藤原四兄弟

四月 藤原房前(五七歳) 七月 藤原麻呂(四三歳) 七月 藤原武智麻呂(五八歳)  
八月 藤原宇合(四四歳)

#### \* 天平九年に亡くなった高官

四月 散位従四位下大宅朝臣大國 六月 太宰府式従四位下小野朝臣老  
六月 中納言正二位多治比真人懸守 七月 散位従四位下大野王  
七月 散位従四位下百濟王郎眞 八月 中宮太夫兼正四位下橘宿禰佐為  
八月 天智天皇皇女三品水主親王

#### ● 太政官符の発令……天平九年六月二六日

\* 『類聚符宣抄』第三「疾疫」に、天平九年六月二六日付『太政官符』が残されている。

……司法・行政・立法を司る国家最高機関である「太政官」が、東海・東山・北陸・山陰・南海の諸道の諸国司に、疫病の治療法と禁すべき食物についての七か条を命令する。

(以下、現代語訳で示す)

一 この疫病は赤斑瘡という。発病時の症状は、**瘡**(熱病)に似ている。発熱してから発疹が出るまで三・四日、あるいは五・六日かかる。瘡の出る期間はまた、三・四日続く。全身は焼けるように熱く、冷水をのみたがるが、決して飲ませてはならない。瘡も治ろうとし、熱気も治まるころに、下痢がまたおこり、早く治療しないと、血便になる。出血は下痢の当初から、或は後の場合もあり、さだまらない。併発する症状は四種類あり、咳。或は嘔吐。

或は吐血。或は鼻血である。このうち合併症よりも下痢の治療に最も急がねばならない。この意を周知し、治療に努めよ。

一 広い布と綿で腹・腰によく巻いて、暖かくして冷やしてはいけない。

一 寝具は粗末であろうが、地面に寝かせてはいけない。床に敷物を強いて寝かせなさい。

一 粥、おもゆ、煎り飯、粟汁などは、温冷にかかわらず食べさせなさい。ただし、鮮魚や肉や生野菜は食べないように。また水や氷を採らないように慎みなさい。下痢をしたらニラやネギを煮て、大量に食べさせなさい。もし赤白痢になれば、モチゴメの粉を米粉に混ぜて煮て、二度・三度、飲ませなさい。また乾燥したモチゴメやウルチを粥にして食べさせなさい。もし症状がともらなければ五・六度食べさせなさい。気を暖めないように。モチゴメは細かく碎き、決して荒くしてはいけない。

一 この病気は飲食をしたがらないが、無理にでも食べさせなさい。発病したら、焼いた海藻や搗いた塩をたびたび口に含ませなさい。口や舌が荒れてもおこないなさい。結果はよい。

一 回復後も二十日間は、鮮魚・肉・生野菜を取ることや、生水・水浴・房事・風雨の中を無理に歩いたりすることは慎みなさい。もしこの注意を守らないと、霍乱になって、下痢が再発する。いわゆる「勢発」がおきれば、兪附・扁鵲のような名医を連れてきても手遅れである。二十日たてば、魚、肉を食べたければ、よく炙ってから食べなさい。ホシアワビやナマリブシのたぐい、乾し肉もよい。ただし、鯖や鱈は干物でも食べてはならない。年魚は焼かずに食べてはいけない。蘇（乳製品）や蜜・豉（納豆等）などは禁止しない。

一 疫病を治そうと思つたら、丸薬・散薬などを服用してはならない。もし熱が引かなければ、人参湯を服用させるのはよい。

四月以来、京・畿内では疫病により死亡者が続出している。諸国の人々の病気の大きいことを知る。そこで、注意を簡条書きにして諸国に伝達する。官符本文は到着次第国府で写し取り、郡司主帳已上一人を使者として、隣国に送付して滞留させてはならない。また国司は部内を巡行して、百姓に内容を告示しなさい。まし粥や重湯にする米がないものがあれば、国司は（正税の倉を開いて）官物を給付しなさい。その使用量を具に記録して印をこれに捺しておく。官符が到着したらすぐに実行しなさい。

正四位下行右大弁 紀朝臣 従六位下守大史勲十一等 壬生使主  
天平九年六月二十六日

……重要なのは、奈良時代においても、すぐに感染症対策がたてられ、感染症が広がる兆候があると都を封鎖、また太政官が、各国の国司に、その治療法を指示し、かつ貧の家庭に薬を届けるよう、迅速に指示していることである。当時の最先端の医学の知識に基づいて、未知の感染症に立ち向かっている奈良時代の人々の姿が垣間見られるのである。

### 三 「遣新羅使歌群」とは？

● 『万葉集』巻十五に収載されている「遣新羅使歌」が、まさしくこの天然痘（をもたらし）の時期に新羅に渡った遣新羅使の歌群である（三五七八〜三七二二番歌の一四五首の歌群〔記名歌三〇首、所に当たりて誦詠する古歌一二首、女性の歌五首、五首を除く使人の無記名歌九八首〕）。

この遣新羅使は天平八年（七三六年）六月に難波を出航した遣新羅使であり、続日本紀によれば、大使は阿倍朝臣継麻呂、副使・大伴宿禰三中、大判官・壬生使主宇太麻呂、少判官は大蔵忌寸麻呂で、途中、海難、伝染病などのさまざまな苦難に遭遇し、しかも、新羅において「不<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>使旨<sub>一</sub>」放<sub>レ</sub>却<sub>二</sub>されるという侮辱的な扱いを受け、大使は帰途、対馬で死亡し、副使もまた発病のたぐいに伴朝が約二カ月も遅れるという運命をたどった遣使であった。しかし、歌々にかかる悲運をたどった特定の遣新羅使であることを表に立てて歌っていない。歌群は、特殊な遣新羅使の姿を語るのではなく、遣新羅使として、皇命のままに家郷を離れ、さまざまな環境と自然のなかで、再会を期しつつ、深まる家郷への恋情に耐える人々の心を伝えようとしている。

吉井巖『萬葉集全注 卷第十五』（有斐閣・一九八八年）

### ● 天平八年の遣新羅使Ⅱ第二十三次の遣新羅使

……天平八年二月二八日拜命・四月一七日拜朝 ↓ 天平九年一月二六日朝京

遣新羅使大判官従六位上壬生使主宇太麻呂、少判官正七位上大蔵忌寸麻呂ら京に入る。大使従五位下安部朝臣継麻呂、津嶋に泊りて卒しぬ。副使従六位下大伴宿禰三中病に染みて京に  
入ること得ず。  
〔続日本紀〕天平九年正月二六日条

壹岐嶋に至りて、雪連宅満の忽ちに鬼病に遇ひて死去りし時に作る歌一首

天皇の遠の朝廷と韓国に渡る我が背は家人の斎ひ待たねか 正身かも過ちしけむ 秋去らば 帰りまさむと たらちねの母に申して 時も過ぎ 月も経ぬれば 今日か来む 明日かも来むと 家人は 待ち恋ふらむに 遠の国 いまだも着かず 大和をも 遠く離りて 岩が根の 荒き島根に 宿りする君  
（卷15・三六八八）

### 反歌二首

岩田野に宿りする君家人のいづらと我れを問はばいかに言はむ  
世間は常かくのみと別れぬる君にやもとな我が恋ひ行かむ  
（卷15・三六八九）  
（卷15・三六九〇）  
右の三首は挽歌

四 巻頭十一首―「妹」と「秋」―

新羅に遣はさるる使人ら、別れを悲しびて贈答し、また海路に情を働ましめて思ひを陳べ、あはせて所に当たりて誦詠する古歌

- 1 武庫の浦の 入江の洲鳥 羽ぐくもる 君を離れて 恋に死ぬべし (巻15・三五七八)
- 2 大船に 妹乗るものにあらませば 羽ぐくみ持ちて 行かましものを (巻15・三五七九)
- 3 君が行く 海辺の宿に 霧立たば 我が立ち嘆く 息と知りませ (巻15・三五八〇)
- 4 秋さらば 相見むものを 何しかも 霧に立つべく 嘆きしまさむ (巻15・三五八一)
- 5 大船を 荒海に出だし います君 障むことなく 早帰りませ (巻15・三五八二)
- 6 ま幸くて 妹が斎はば 沖つ波 千重に立つとも 障りあらめやも (巻15・三五八三)
- 7 別れなば うら悲しけむ 我が衣 下にを着ませ 直に逢ふまでに (巻15・三五八四)
- 8 我妹子が 下にも着よと 贈りたる 衣の紐を 我れ解かめやも (巻15・三五八五)
- 9 我がゆゑに 思ひな瘦せそ 秋風の 吹かむその月 逢はむものゆゑ (巻15・三五八六)
- 10 袴袞 新羅へいます 君が目を 今日か明日かと 斎ひて待たむ (巻15・三五八七)
- 11 はろはろに 思ほゆるかも しかれども 異しき心を 我が思はなくに (巻15・三五八八)

右の一一首、贈答

↓ 女と男との贈答を五回繰り返すという構造になっており、男女双方の誠実を誓い合い、また、男をひたすら待つ女性の思いを示す歌群として「遣新羅使歌群」は始まる。別れを悲しむ男女、待ち焦がれる女性の姿に焦点がおかれている。また「秋」には再会が果たされるというテーマを基軸にして、展開されていく歌群でもある。

◎ 秋と妹（家人）を詠んだ歌……約六〇首

「霧」……

万葉集で霧を詠み込んだ歌は約七〇首、そのほとんどは秋の霧である。

- 彦星し 妻迎へ舟 漕ぎ出らし 天の川原に 霧の立てるは (巻8・一五二七)
- 大野山 霧立ち渡る 我が嘆く おきその風に 霧立ち渡る (山上憶良 巻5・七九九)

「嘆く」……

名詞形「嘆き」を含め、万葉集に約一〇〇例。もともとは大息をつくことだったと考えられ、人の鬱々とした心の状態や思いのままにならない悲しみ、怒り、訴えなどが吐露される歌が大多数を占める。つまり、相聞であれ、挽歌であれ、「嘆き」は心の中の喪失感を詠んだものとも定義づけられる。その喪失感に溜め息としても具現化され、霧とともに歌に詠み込まれてくる。霧は嘆きの息と考えられ、風はその嘆きの霧さえも消失させる。風は心の空洞化を端的に表しているといえる。こうした風と「嘆き」との結びつきは、巻3・四二五、巻4・四八九にもみられる。(青木生子、橋本達雄『万葉ことば事典』大和書房・二〇〇一年)

- 12 我がゆゑに 妹嘆くらし 風早の 浦の沖辺に 霧たなびけり (巻15・三六一五)
- 13 沖つ風 いたく吹きせば 我妹子が 嘆きの霧に 飽かましものを (巻15・三六一六)

↓ 3・4を意識

- 14 夕されば 秋風寒し 我妹子が 解き洗ひ衣 行きて早着む (巻15・三六六六)
  - 15 我が旅は 久しくあらし この我が着る 妹が衣の 垢つく見れば (巻15・三六六七)
- ↓ 7・8を意識
- 16 帰り来て 見むと思ひし 我が宿の 秋萩すすき 散りにけむかも (巻15・三六八一)
  - 17 竹敷の 黄葉を見れば 我妹子が 待たむと言ひし 時ぞ来にける (巻15・三七〇一)
  - 18 竹敷の 浦廻の黄葉 我れ行きて 帰り来るまで 散りこすなゆめ (巻15・三七〇二)

↓ 遣新羅使として旅立ってしまう悲しさや嘆きを、「霧」という秋をイメージさせる景物で表現しており、それはまた、秋には再会できるという意味合いが込められていると考えられる。↓ 「七夕」の再会を想起させる。

- 七夕に天漢を仰ぎ観て、 各 思ふ所を陳べて作りし歌三首 (おののおの)
- 19 秋萩に にはへる我が裳 濡れぬとも 君が御船の 綱し取りてば (巻15・三六五六)
  - 20 年にありて 一夜妹に逢ふ 彦星も 我れにまさりて 思ふらめやも (巻15・三六五七)
  - 21 夕月夜 影立ち寄り合ひ 天の川 漕ぐ船人を見るが 羨しさ (巻15・三六五八)

● 『万葉集』における「七夕」

『万葉集』には、七夕を詠む歌が、長歌・短歌あわせて一三〇首収載されている。

……天武八年(六八〇年)と推定するものから始まり、万葉集第四期の大伴家持の作までに及び、『万葉集』あつて、特異な一群を形成している。柿本人麻呂・山上憶良・大伴家持等、万葉時代の著名な歌人が詠んでおり、万葉びと全体の関心・志向の高さを伺うことができる。

- ・ 天の川 楫の音聞こゆ 彦星と 織女と 今夜逢ふらしも (巻10・二〇二九)
  - ・ 秋されば 川霧立てる 天の川 川に 向き居て 恋ふる夜ぞ多き (巻10・二〇三〇)
  - ・ 一年に 七日の夜のみ逢ふ人の 恋も過ぎねば 夜は更けゆくも (巻10・二〇三二)
- 22 黄葉は 今ほうつろふ 我妹子が 待たむと言ひし 時の経ゆけば (巻15・三七一三)
  - 23 秋されば 恋しみ妹を 夢にだに 久しく見むを 明けにけるかも (巻15・三七一四)
  - 24 天雲の たゆたひ来れば 九月の 黄葉の山も うつろひにけり (巻15・三七一六)

◎ 約束の秋は、すでに対馬で過ぎており、その秋までの行程を詠むことで往路を閉じる、という編纂の意図を示している。

Ⅱ 「実録風な創作」……実録に基づきながらも、虚構的な歌物語として組み立てられた、心情的には「妹」を、時間的には「秋」をモチーフとする虚構性としての歌群。

## 五 航海のはじまり

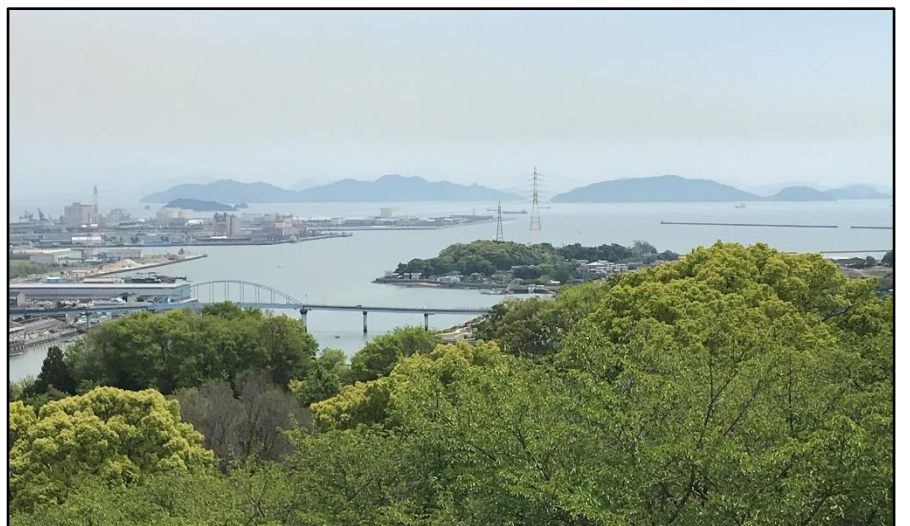
- 25 妹とありし時はあれども別れては衣手寒きものにぞありける (巻15・三五九一)
- 26 海原に浮寝せむ夜は沖つ風いたくなく吹きそ妹もあらなくに (巻15・三五九二)
- 27 大伴の御津に船乗り漕ぎ出てはいづれの島に慮りせむ我れ  
右の三首、発つに臨む時に作る歌 (巻15・三五九三)
- 28 潮待つとありける船を知らずして悔しく妹を別れ来にけり (巻15・三五九四)
- 29 朝開き漕ぎ出て来れば 武庫の浦の潮干の潟に 鶴が声すも (巻15・三五九五)
- 30 我妹子が形見に見むを 印南都麻 白波高み 外にかも見む (巻15・三五九六)
- 31 わたつみの沖つ白波 立ち来らし 海人娘子ども 島隠る見ゆ (巻15・三五九七)
- 32 ぬばたまの夜は明けぬらし 玉の浦にあさりする鶴 鳴き渡るなり (巻15・三五九八)
- 33 月読の光りを清み 神島の磯みの浦ゆ 船出す我れは (巻15・三五九九)
- 34 離れ磯に立てるむろの木 うたがたも 久しき時を過ぎにけるかも (巻15・三六〇〇)
- 35 しましくもひとりありうるものにあれや 島のむろの木 離れてあるらむ (巻15・三六〇一)
- 右の八首は、船に乗りて海路上に入りて作りし歌

\* 我妹子が見し軻の浦のむろの木は常世にあれど見し人ぞなき (大伴旅人 卷3・四四六)

軻の浦の磯のむろの木見むごとくに相見し妹は忘れえぬやも (大伴旅人 卷3・四四七)

大伴の御津 (難波津)	↓	武庫の浦—撰津 (畿内)	↓
印南都麻—播磨 (山陽道近国)	↓	地名なし	↓
玉の浦—備中 (山陽道中国)	↓	神島—備後 (山陽道中国)	↓
軻の浦—備後 (山陽道中国)	↓	軻の浦—備後 (山陽道中国)	

◎ 遣新羅使歌群は、山陽道沿いの瀬戸内海航路を詠んで、当時の瀬戸内海航路の現存する唯一の記録という性格を持ち、歴史的にも貴重な資料となっている。



玉の浦 (倉敷市玉島)



軻の浦 (福山市軻)



備後国の神島 (福山市神島)

